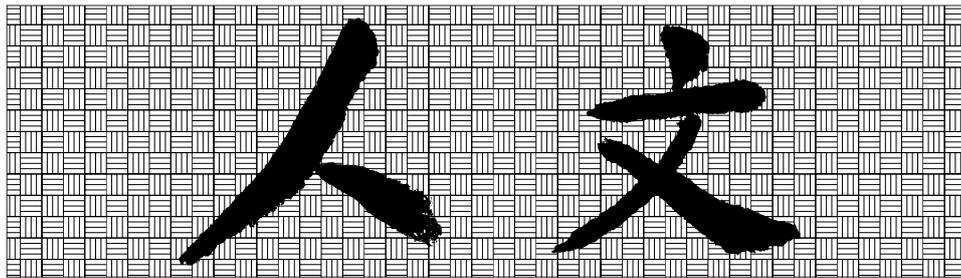


富山大学人文学部同窓会会報



No. 33
 2011. 10. 1
 富山大学人文学部同窓会
 〒930-8555 富山市五福3190
 電話(076)445-6143
 F A X (076)445-6141
 E-mail alumnil@hmt.u-toyama.ac.jp

題字 大島文雄先生

1000年前の仮名を読む

人文学部教授 鈴木 景二

▶射水市赤田I遺跡で出土した土器（射水市教育委員会）…直径13センチほどの扁平なうつわ。外面に墨で仮名文字が書かれている。ひら仮名が生まれ、『古今和歌集』が成立したころのものと考えられ、平安時代の文化財として全国的にみても貴重なもの。越中で見つかった背景もいろいろ考えることができる。



◀側面からみた仮名墨書土器。正確な用途は不明だが、酒盃であると考えられる。射水市の竹内源造記念館に複製品が展示されている。

今年の総会で
 ご講演いただきます。
 (詳細は8ページ参照)

人文学部の近況

富山大学人文学部長 吉田 俊則



時代の土器様式などをご研究なさっています。藤本先生は、アフリカ北東部エチオピアの山岳地帯に居住する農耕民マロを主たる研究対象として、農耕技術や土地利用に関する実証的な研究をご専門としています。

今年の四月から学部長に就任いたしました。二年間務めさせていただくにあたって、同窓会のみなさまに人文学部の近況をご報告し、挨拶にかえさせていただきます。

昨年来の二年ほどのうちに三人の新任教員をお迎えしましたので、まずはご紹介いたします。昨年九月、人文地理学の准教授として鈴木晃志郎先生をお迎えいたしました。長く人文地理学教室で教鞭をとり、昨年三月に定年退職なさった浜谷先生のご後任で、行動地理学がご専門です。また、今年の四月には定年退職された考古学の黒崎先生の後任として次山淳教授を、転出された文化人類学の都留先生のご後任として藤本武准教授をお迎えしました。次山先生は日本考古学がご専門で、とくに古墳

体制を築くことが目的の一つにありました。定員を十名から八名に減らしたのは、文系大学院における全国的な志願者減の傾向に関連したものと思います。こうした改組によって大学院教育が活性化し、優れた人材を世の中に供給することが出来るように、また、大学院で学ぶ方々が質の高い研究成果を達成できるように、新しい教育組織を大切に育て上げていきたいと考えています。

学部の教育に関してご報告したいのは、数年前に着手し、現在ほぼ完成にたどりつつかある「人文学部学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）」のことです。ディプロマ・ポリシーとは、教育の質保証の一環として今日すべての大学に求められている、学部が入学者に約束するいわば公約のようなものです。人文学部を卒業した皆さんには、少なくとも次に掲げるような知的能力と人間的な洞察力を身につけさせることを目的とします。

次に人文学部における近年の出来事としてご報告したいのは、大学院人文科学研究科（修士課程）の改組が行われ、今年四月から新体制で出発したことです。大学院はこれまで、地域文化研究と文化構造研究の二専攻からなり、それぞれに五名、総計十名の学生定員でしたが、今回の改組では、二専攻を人文科学研究の一専攻にあらため、定員八名としました。一専攻に改めたのは、ずいぶん前に一学科制への改組をすませてあった学部に対応しながら、大学院でも専門分野を超えた、より緊密な協力

1. 創造力
課題探求力 自ら進んで問題を発見し解決する能力を身につけている。
調査力 調査・研究のスキルを修得している。

人文学部 学位授与方針 (ディプロマ・ポリシー)

- 2. 責任感
仲間に対する責任 共同作業の中で、自分の果たすべき役割を認識し、遂行することができる。
他者に対する責任 異なる立場の人や他文化の人を理解し、他者に対して責任を果たし現代を共に生きることができる。
- 3. コミュニケーション能力・情報リテラシー
コンピュータを利用して多種多様な情報を分析し、プレゼンテーション等に活用することができる。
専門的リテラシー 文献・資料等を正確に読み解き分析することができる。
協働性 共同作業を価値観や立場の異なる人とも協力して行うことができる。
情報発信力 日本語運用能力や口頭発表に必要なスキルを身につけている。
- 4. 幅広い知識
異文化コミュニケーション能力 外国語運用能力を高め、環日本海地域をはじめとした世界の諸地域で活躍できる能力を身につけている。
文化理解 異文化を幅広く理解し、多文化共生社会を生かせることができる。

問題発見 人間の社会活動に関する幅広い知識・視点を背景に、現代社会の諸課題を見つめることができる。
自然との調和 科学・技術に関する幅広い知識、視点を背景に、地球環境や自然と人間社会の調和的發展に寄与することができる。
教養的知識 人文科学、社会科学、自然科学の各分野を横断的、総合的にとらえる学際的視野を身につけている。

5. 人文学に関する専門的知識
富山に関する知識 富山の自然や地域性に関する幅広い知識を持ち、地域に根ざした視点を身につけている。
健康に関する知識 健康で文化的な生活を送る指針を持っている。

人間理解 人間についての深い理解を持って、社会生活にのぞむことができる。
幅広い視野 人類の文化・社会活動や歴史を総合的にとらえる幅広い視野を身につけ、現代的課題に対処することができる。
国際性 豊かな国際感覚を身につけ、市民生活や職業のなかで活かすことができる。
専門知識の活用 人文学の深い知識や研究スキルを身につけ活用することができる。

右に掲げた少しめまいがするような高い目標を、表面的な技術としてではなく、学生自らが四年間の大学教育を通じて自然に体得するような、もっと充実した教育体制をつくりあげることが、大学教員には今後不断に求められるというべきかもしれません。

旧制富山高校の伝統を大切にしながら、大学をとりまく新しい状況に対応してゆくこと、試行錯誤を繰り返しながら進んでいきたいと考えています。同窓会のみなさまの苦言、助言、そしてご協力を切にお願い申し上げます。

ムカシの話

高畑 史 子 (3回英文)

去る七月二十四日、地上波テレビのアナログ放送が終了し、デジタル放送に移行した。テレビ放送が始まって実に五十年余り経った。

昭和三十年三月、蓮町の文理学部文学科を卒業した頃、放送と云えばラジオのことで、テレビはまだ生まれていなかった。

新聞に「北日本放送で女性ラジオプロデューサー二名募集」の記事が載ったのは二月だったろうか。就職は先生がいいか、出版社にしようか、決めかねていた時で、その記事に飛びついたのだった。

採用試験当日は私同様ラジオプロデューサーという目新しい仕事に興味をもった女性がワンサと押し寄せ、気の遠くなるような倍率であった。

筆記試験と面接の結果、運よく新採用二人の中に入った。二、三日後二人が呼び出され、社長から月給五千円だが私費から五百円上乘せして下さいという。(多分私達が意外に可愛らしか

つたからだろうか?) 相棒の女性は一歳年下で短大を出て中学の教師をしていたという。後で私にポツリと先生の給料は八千円だったと云った。何しろ富山に

初めて誕生した民間放送で開局三年目だった。

三月末から入社し始めた私達は早速先輩の女子プロデューサーから簡単な説明と指導を受けながら一週間もしない中に放送原稿を書き始めていた。当時はアナウンサーが自分の言葉で聴取者に伝えるのはスポーツ中継だけと云われた時代である。朝九時から夕方五時迄担当番組の放送原稿やコマージュルを書き続ける毎日が始まった。

時にはコマージュルソングの作詞もさせられた。著作権の概念がまだ明確でない時代で、元音楽教師をしていた男性プロデ

ューサーが曲をつけていた。総曲輪通りを歩いていて商店から自分の作詞したコマージュルソングが流れていると、思わず首をすくめてひそかに赤面したも

のである。又、コマージュルを書くのはちょっと大へんだった。営業の人が契約してきたスポンサーのコマージュルを突然、時間を区切って書かされることが多い。すると書きかけの急ぎの原稿があっても脇に寄せてすぐまとめねばならない。或る時、外出から戻った営業マンが私の机の傍に立って云った。

「オクイさん(旧姓)コマージュル急いで書いてくれ。ホラ、



これはうまいんだよ。」

彼は瓶に入った佃煮のような写真のチラシをゆらゆら振りながら云った。

「ハイ、何のコマージュル?」

「これはうまいよ。」

「そう、佃煮? 何の佃煮のコマージュルですか?」

「これはうまいよ。ホント。これはうまい。ホントにこれはうまいよ。」

「美味しいのはわかりました。

何のコマージュル? 名前を覚えて下さい。」

「これはね、これはうまいよ。」

商品名が『これはうまい』という海苔の佃煮だった。...

営業の人は契約をとつてくるとルンルンなので顔も言葉も笑いにくずれて新米の女子プロデューサーを面喰らわせからかった。

一方、目新しい言葉が世間に浸透して行く過程を実感したものだ。例えば私達が日常使っていた「チャック」という語が企業のコマージュルからファスナーと呼ばれはじめ、定着した。又、バーベキューという語がその頃殆ど一般に知られていなくてどう訳すか問題になった。「バーベキュー」は単語としては少し長くて云いにくいけれど多分これからはこのまま頻繁に使われるようになるに違いない、と話し合い、そのまま使うことにした。数ヶ月後には「バーベキュー」は全国で昔からの外来語のように使われていた。...

音楽番組ではVOAのレコードを流す番組があった。レコードは全て英語なので外大出身の男性プロデューサーと二人で勝手に訳して日本語のタイトルを

つけた。レコードを何度も回して歌手の声に耳をすませ、魅力的な歌詞の一部をナレーションとして入れた。

女子プロデューサーのメインの仕事は当然婦人や子供向け番組で私は婦人番組担当になった。私の放送時代の最も懐かしい思い出は英文の恩師須沼吉太郎先生に出会ったことである。

当時女性向けの教養番組としては女子アナウンサーによる世界の名作の朗読だけだった。先生に出演をお願いしたところ、快く引き受けて下さり、「現代アメリカ文学」と題してヘミングウェイやフォークナー等について女子アナウンサーと対談して下さった。放送後、とてもいい番組だった、と主婦の声や便りがいくつも寄せられた。

先生の御恩で私の古き良きムカシの一こまが定着し、うれしい。

数年後、「テレビジョン」がはなばなしく登場して今五十年余、何やら爛熟の気配があるようだ。

(富山市在住)



追悼 手崎政男先生 活を入れて先生は逝かれた

中川 禎 子(9回国)

先生の訃報が伝えられた日、哀悼の情にたえず、私は瞑目して終日をすごしました。先生は昭和三十二年、私たち九回生が入学したその同じ年に富山大学に赴任され、国文学という素晴らしい学問世界のあることを教えて下さいました。

先生は御自身の恩師であられた、藤村作、久松潜一、池田亀鑑、橋本進吉、時枝誠記先生方、当時の学界の超一流の先生方の業績、学問に対する情熱、研究の御苦労を、敬愛の念をこめて語りきかせつつ、この道に志す者のあるべき姿、覚悟を教えてくださいました。

温厚なお人柄の先生は、いつもやさしい口調で講義をなさいました。しかし学問に対する姿勢は、極めて厳しいものがありました。それは先生御自身が、衝撃的な経験を経験をなさったからだとい

昭和十九年、軍隊入隊時に、唯一許されて「神皇正統記」を持参。はじめて精読してびっくり仰天。それまで伝え聞いていたものとは違い徹頭徹尾デモクラシーの本であることを知り、真実は他人の評価を鵜呑みにしてはならないということを知んだと云われました。

以来先生の授業、講義はこの信念で一貫。「明月記」の演習の時などは、何度音をあげて天を仰いだか知れません。

しかしその特訓のお陰で一行の文章のなかの一語が伝える高遠で豊饒な魅力に魅了されて、作品世界の沃土に導かれ、文学の何たるか、文学の力とは何かについて、臆げながらも学ぶことができました。



先生の学問への情熱は御退官後も熱く熱く、平成六年には、

空前の偉業と評される、千百ページを越える大著『方丈記論』をさらに平成二十一年には、あらゆる方丈記論が瓦解すると評される『通読方丈記』を上梓され、平成のぬるま湯につかかって安穩としていた不肖の教え子私どもに、小気味よく活を入れられました。

先生は故あって御赴任から御退官まで片道六時間を物ともせず東京から御通勤なさりながら学部長の重責も全うされました。

一時、大学紛争の騒然とした最中、火の粉を浴びつつも、ひたすら誠実に温厚に粘り強く、血気に逸る学生達と対話を重ねられてその責務を果されました。

早くに奥様を、一昨年には御長男様をも亡くされるという悲しみの中にあつても、先生は最期まで毅然と且つ敢然と一学徒として九十八年の一生を見事に貫かれました。

ここに深甚の敬愛と感謝をこめて、先生の御霊の安からんことを心よりお祈り申し上げます。

合掌

(朝日町在住)



研究室 国際文化論 コース

准教授 齊藤 大紀

卒業生のみなさま、いかがお過ごしでしょうか。

国際文化論コースは、1997年の発足以来、小澤浩先生、神徳昭甫先生が退職され、若尾正行先生、上野隆三先生、藤野真子先生が転任されて、現在、立川健治(日本史)、吉田俊則(ロシア史)、鈴木信昭(朝鮮史)、末岡宏(中国哲学)、齊藤大紀(中国文学)、青木恭子(ロシア史)、小野直子(アメリカ史)の7名の教員が、とりあえず元氣潑刺と教鞭を執っております。

在學生は、北は北海道から南は愛媛まで、全国各地から総勢51名の若者が集い、勉強にアルバイトに飲み会に恋愛に、日々奮闘努力しています(後の項目ほど奮闘度が増していることはありません、念のため)。

このほかにも中国からの留學生が5名、ロシアからの留學生が1名おり、日本人學生と一緒に、授業に課外活動に力を入れています。留學生がフツーに活躍しているのも、昔からのことかもしれませぬ。卒業生のみなさんも、それぞれ懐かしい留學生がいらっしゃるのではないのでしょうか。

スポーツ交流大会の後、前期後期の学期末、晴れて気分が朗らかな日、雨が降って帰るのが面倒な

日、たいいてい誰かが飲み会をやっているのも、相変わらずのことかもしれません。富山にいらつしやうた際には、また顔を出してみて下さい。

そうそう、卒業生のみなさんが気にしているであろうスポーツ交流大会の成績は、ソフトボールが平成19年度と23年度に優勝し、バレーボールも平成22年度に優勝しています。演習室には、誇らしげに賞状が飾られていますので、いらつしやうた際には、これもぜひ眺めてやってください。



国際文化論コースも、発足以来、すでに十四年の歳月がたち一期生のみなさんは、早くも三十路の坂を越えられたかと思ひます。

そのせいかわかりませんが、数年前から教員のところにもしばしば結婚式の招待状が届いたり、また家族が増えたりという年賀状が届いたりするようになりまし。卒業生のみなさんが「幸せは長つづきしないよ」という教員の教えを勇敢に乗り越え、人生の幸せを手に入れているという知らせを耳にして、教師冥利につきるとはまさにこのことと、教員一同よろこばしく思っている次第であります。

歴史を学ぶ人

古岡 奏子 (57回日本史)



私は今、社会科学を教える仕事をしている。中学・高校時代に、授業のおもしろい先生方に出逢った。それが、日本史コースへ進学し、この職に就いたきっかけである。

大違い、見ると読むのも大違いだった。見たことのない漢字、見当もつかなくずし字が並んでいた。一つの古文書を解説するのにも、何冊もの辞書をひいた。漢字を調べ、用語の意味、背景を調べ続ける。その古文書全体の内容、役割がわかったとき、そこには文書を必要とした人の姿や生活が見えた。

授業での鍛錬を試す場が、夏と冬の年二回、二・三年生で行く研修旅行だ。富田正弘先生の取り計らいで、貴重な文書を多く見せてもらった。有名なものでは、織田氏や足利氏の花押や北条氏の史料もあった。私達の想像も及ばないが、文書の状態を悪化させてしまったため、口をハンカチで覆っての実習である。四〇年以上前の文書が現代に存在するということは、そうせねばならぬほど、奇跡のようなことなのだ。いつ起こるかもわからない戦争や災害を、幾度となく、くぐり抜けてきたのだから、このコースで学んでいる間、

まるで教科書のメイキングを見ているような気分だった。一つの研究テーマをとってみても、膨大な先行研究がある。先人達が、私達が目にした何十倍もの古文書に挑まれた。その結果が教科書に記載され、史実として認識されていく。

生徒たちと話をしていると、よく「歴史は過去のことなのに、勉強して何の意味があるの？」と聞かれる。私達は、過去に起こった出来事を体験することは決してできない。だから、歴史を学ばねばならないのだ。過去に起こったあやまちを知り、今に生かすために。

私は、教える者としてのキャリアも浅ければ、歴史についての知識もまだまだ足りない。でもいつの日にか、生徒たちが、「歴史を学んでおいてよかった」と思えるような授業をできるようにになりたいと思う。

(射水市在住)



研究室から

フランス言語文化コース

教授 村井文夫

卒業生の皆さん、お元気それぞれの分野でご活躍のことと思います。本研究室は現在、ヨーロッパ言語文化講座に属するフランス言語文化教育研究分野となっております。



定試験に加えて、オルレアンでのホームステイ語学研修、フランス語弁論大会への挑戦、個人単位での短期長期の留学など、活動範囲が大きくひろがってきています。特にオルレアン研修は、フランス語の実地研修という枠を超えて、フランスとフランスの人々に触れる機会を持つという、観光旅行ではありえないと言ってもよい貴重な体験の場となっております。一人ひとりの一生の宝と言って差し支えないのではないのでしょうか。

さて、在学生はここ数年、各学年、平均して8〜10名程度を数え、ただでさえ手狭な演習室に椅子を並べる空間を確保するのも大変です。

卒業後の進路では、国内外でさらに勉学を続ける者、各種公務員、企業その他多岐に渡っています。航空業界を目指す人が時々でており、教員スタッフが学会その他行事、観光などで搭乗した際、思わぬ拍子に声がかかって驚くこともあります。

また、近年においては以前から行っていた実用フランス語技能検

見つめる目になった卒業生の皆さん、是非演習室をお訪ね下さい。3階つきあたりのいつも変わらないあの部屋です。

今更ながら 勉強の日々

北川智重子(34回独文)

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災により被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。また一日も早い復旧復興をお祈り申し上げます。

私が大学を卒業したのは昭和六一年。早や二五年もの年月が過ぎてしまいました。
この二五年の間に、私は四カ所で仕事をしてきました。現在は労働政策関係の部署で就労の相談・仕事の斡旋をしています。卒業後、電気機器の商社に勤務し、五年後二人目の子供の出生のため退職。しばらくは子育てをしながら専業主婦をしていました。二人目が入園すると同時に再びパートタイムで働き始めました。職場は自宅に近い私立大学で、学内の売店や一般教

養部の学科事務室に勤務してました。この職場も出産のために退職し、その後十年程、夫の自営業を手伝っていました。

平成十九年に製造系派遣会社にご縁があり、ここでは主に面接業務に携わりました。わずか二年間でしたが、面接業務では年齢性別を問わず沢山の方に仕事を紹介しました。職歴や希望を聞きその方に応じた仕事を提案しました。マッチングがうまくいかず落ち込んだり、時には感情移入することもありました

が、その二年間で約百五十名の方々とお会い出来たことは、私にとって大きな財産だと今も思っています。
学生時代は勉強もせず落ちこぼれの私でしたが、新しく仕事に就く度にそこで必要な資格を少しずつ取るようになりました。ここ最近では毎年資格・検定試験を受けています。

面接の仕事は、まず相手の言いたい事を十分に聴くことから始まります。希望や不安や困っていることなど、相手の考えや気持ちに寄り添うことが大切です。しかし、就労・労働に関する知識もなければ応対ができません。カウンセリングスキルの

必要性も感じ、今はメンタルヘルスマネジメントと産業カウンセラーの資格を取るために勉強の毎日です。

これからも、今までの経験を活かして人のお役に立てたらという思いを忘れずに頑張りたいと思っています。

(金沢市在住)



羊飼いを研究して

思いつくこと

渡辺 和之(40回文化人類)

私は、山登りがしたくて富山大学に入学した。卒業後は、ネパールで文化人類学のフィールドワークをするため、大学院に進学した。一昨年、研究成果を出版した。山で遊んでいたのではないことが証明できて、正直ほっとしている。

私の研究テーマは、山地放牧である。ヨーロッパからヒマラヤに至る地域には、山地を季節的に移動しながら家畜を放牧する人たちがいる。

家畜を飼うのはじつに大変なことである。生き物相手の商売

だけに、代わりの人がいないと休みもない。畜舎で飼うなら草刈りが必要だ。放牧をするなら迷子になった家畜を探しにゆかねばならない。しかし、根気よく育てれば、家畜は人に恵みをもたらす。

まず、家畜を飼うことで、農業に不向きな場所でも生活できるようになる。ネパールでも、標高三千メートルを越えると、米も実らぬ寒冷地となり、麦やジャガイモなどしか育たなくなる。しかし、家畜なら標高五千メートル近くまで放牧できる。

また、家畜を飼うことで農業よりも手っ取り早く稼ぐことができる。最近では、ネパールの若者ですら羊飼いをやりながらなくなったが、長年続けた羊飼いのなかには、羊を売って得たお金で家や土地を買った人がいる。職業の選択肢が少なかった時代には、土地なし農民が羊で成り上がることも可能だった。

最近、日本では、原発事故の影響で、福島県の畜産農家のなかには廃業に追い込まれる人も出はじめた。これまで生産者の側から家畜飼養を研究してきた私としては、報道で知る限りでも、その辛さが伝わってくる。

たとえば、飯館村は福島県のなかでも寒い村で、桜が咲くのは北海道と一緒なのだそうだ。農業の生産性が少ない分、この村では家畜の収入に依存する割合が高かった。原発以外に近くの現金収入が少ない村が避難区域に指定され、家畜飼養の道が絶たれた。今後村人は、避難指示が解除されたあと、何をして生きてゆけばよいのか？ 想像するにあまりある。

消費者の多くは食の安全しか関心がなく、過疎化に苦しむ生産者の苦境まで思いをはせる人は少ないのだろう。これは市場経済の常なのかもしれないが、震災復興に国民的な関心が注がれる今だからこそ、日本の家畜飼養の現状も調査し、伝えてゆきたいと思う。(大阪府在住)



〔拙著『羊飼いの民族誌』明石書店刊。お近くの図書館で購入依頼して頂くと幸いです。〕



富山大学で得たもの

笠一 覚暁
(17回哲学)



我ながら信じがたいのだが、私もの古稀を迎えてしまった。まさに馬齢を重ねたに過ぎず、なにほどのことも達成できなかったものではあるが、少なくとも自分の好きなことをやり続けて来られたことは幸せであつた。実はその契機を与えてくれたのが富山大学だつたのである。

私は子供の頃から書物が好きで、将来は文学部を出て物書きになろうと思つてた。ところが高校時代に進路を決める際に母がどうしても理科系へ行けよといふので、これは私の父が文科系大学生の徴兵猶予が取り消されて動員され、学徒出陣して戦死してしまつたことが母のトラウマになつてくれたからである。女手ひとつで育ててくれた母には逆らふことは出来ず、やむなく工学部に行くことを決めたのだが、馬鹿々々しくなつて受験勉強は全く放棄して、当時流行していたサルトルなどの実存主義文学を読み耽つていた覚えがある。

そうして工学院大学に入学したわけだが、学科は建築学科を選んだ。というのは工学的側面もあるが、建築はまずデザインであり藝術であるからである。ところが建築デザイン、

設計の勉強が佳境に入つてくる三年生のときに挫折してしまつた。というのはクラスメートの作品を見て批評は出来るのだが、自らが設計した作品はこのクラスメートのより格段に劣るのである。どうやっても彼の作品を越えるものは描けなかつたから、建築作品の理解能力はあるものの設計の才能は自分にはないと自覚せざるを得なかつたのである。

けれども建築を見ることは楽しかつたし、また建築作品のデザインを分析することは、読書に似ていると思われた。この建築の解釈が現代建築を対象とした場合は建築批評という領域になるが、歴史的な建築を対象とすればそれは建築史である。それで私は西洋建築史を攻めてみようと考えた。しかし批評であれ歴史であれこうした解釈に方法論を与える基礎理論というものが絶対に必要になる。これが建築論という領域である。そこで先ず建築論を学ばねばならぬといふ考えが、学部の建築学科というところは、基本的に建築家と建築技術者を養成するところであつて、建築史はともかく建築論を教へてはなかつた。従つて大学院に進んで建築論を勉強するしかなかつたのだが、既に学費は尽きていて東京でこれ以上学業を続ける訳には行かなかつたのである。

そこで思い出したのが郷里富山の富山大学に哲学科(正確には文理学部文学科哲学課程)があるということであつた。哲学は総ての学の根底に在るものであるし、また美学も学べるであろうから、哲学は建築の基礎論たる建築論を勉強するのに有益であると考へられたし、何よりも大学の文科系で学べるということが嬉しかつたのである。こうして、母の

希望は一応果たしたことにして、富山大学に学士入学したのであつた。富山大学には三年間学んだが、顧みてみるとまことに贅沢な学びをさせて戴いたと思う。当時、哲学課程には五人の先生がいらしたが、私の学年では学生が二名しかおらず、上級生を入れても全部で五名しかいなかった。同期では先生の数より学生の数が少ないわけで、例えば哲学演習―原書講読―の時間などは一人で半分、同級生が欠席すると丸々二分辛かつたがしかし、実に充実した学習だつたと思うし、また語学を鍛えられたのである。ある意味では師を独占するに近い形で哲学を教つた訳であり、贅沢であつたと言つたけれど、先生には哲学ばかりでなく宗教といふことに関しても目を開かして戴いた。宗教哲学である。詳しい経緯は省くが、ハイデッガーやヤスパースなどの実存哲学と通底させて宗教現象を解明ないし解読して行くといふのは、私にとつては目から鱗が落ちるような経験であつた。そのとき、この同じやり方が、建築現象の解読に適用が可能であるし、またそのことによつて建築論が基礎づけられるのではないかと考へたのであつた。

富山大学卒業後、幸いにして金沢工業大学建築学科に奉職することが出来、西洋建築史と建築論を講じることが出来るようになったのだが、そこで懸案の建築論研究を始め、数年かけて八編くらいの論文を建築学会論文報告集に発表した。これを纏めて昭和五十八年に学位請求論文として東京大学に提出し、学位を得たのだが、幸いに、大幅に改稿し増補をした上で平成七年に中央公論美術

出版で「建築の誕生―ギリシア・ローマ神殿建築の空間概念」と題して上梓することが出来た。これはハイデッガーの現存在論を援用して建築空間の現象構造を解明し、それに基づいて古代ギリシア・ローマの宗教建築を読み解くことを試みたものであつて、正に富山大学で得たものであつた。この自著を館先生にお送りし読んで戴いたのであるが、先生には大変喜んで戴き、内容に共感して戴くことが出来たのは誠に嬉しいことであつた。

金沢工業大学では本務の建築学科の教育・研究ばかりでなく、昭和五十四年頃から新設される予定の新しい図書館、ライブラリーセンターの企画に携はるることになった。この図書館は昭和五十八年に開館し、ユニークな大学図書館として知られて、現在は私が館長を務めているが、もう既に三十年以上も大学図書館の企画に関わり続けているので、私の半分は図書館員・ライブラリアンであると言つて良いであらう。私がライブラリーセンターで担当しているもう一つの重要な仕事は、西洋科学技術稀観書の蒐集である。これは十五世紀半ばの印刷術実用化以降に出版された科学技術における決定的で重要な業績の初版本の体系的コレクションであつて、「工学の曙」文庫といふ名がついている。誰でも知っている有名な稀観書を挙げれば、例えばコペルニクスの「天球の回転について(一五四三年)」、ガリレオの「天文対話(一六三二年)」、ニュートンの「自然哲学の数学的原理(一六八七年)」と言つたような書物で、これらは既にこの文庫に収蔵されている。このコレクションも蒐集を始めてから三十年以上経つので基本的

なものは大抵集まつているのであるが、実はこの蒐集のなかには建築論書が含まれているのである。西洋における建築論書の歴史は古く、古代ギリシアに遡るが古代の建築論は一つを除いて総て失われて現在には伝わらなかつた。紀元前一世紀のローマ帝国の建築家、ウィトルウィウスが書いた「建築十書」のみが伝わり、これが十五世紀末のイタリアで出版されてベストセラーになり版を重ねたのだが、この書を嚆矢として、また出発点として十五世紀から現在まで多様な建築論書が出版され続けているのである。こうした建築論書初版本の蒐集は私にとつては貴重な経験であり、この蒐集のための勉強のなかで、ハンノルヴァルター・クルフトの千ページを超える浩瀚な「建築論全史―古代から現代まで―(一九八六年)」の存在を知つた。これは建築論書の通史として唯一のものであり、蒐集には非常に役に立つた。しかし同時にこの書物は絶対に邦訳しておくべきものだと思つたのである。そこで翻訳に取り掛かつたのだが、私の最も多忙な時期となつてしまつたので訳出は遅れに遅れて十年以上掛かつてしまつた。昨年、漸くこの翻訳を完成させ、「クルフト・建築論全史Ⅰ・Ⅱ」二巻本として中央公論美術出版から出版することが出来た。更にまた、この書に刺激されて、この文庫に蒐集された西洋建築論書に拠つた建築論の歴史が書けないかと考へるに至り、この翻訳と平行しつつ執筆を進めて来たのである。なにしろ遅筆なのでいつ完成するかは解らないが、書き続けて行きたいと思つている。結局、富山大学で得たものが私の仕事を決定したのであつた。

(金沢工業大学環境・建築学部教授)

新刊案内

人文学部縁の方々の新刊を紹介します。

建築論全史(1)(2)古代から現代までの建築論辞典

ハンノ=ヴァルター・クルフト/著 竺覚暁(哲学17回卒)/訳
中央公論美術出版 (1)2009年10月、(2)2010年7月刊

帝国とアジアネットワーク：長期の19世紀

川村朋貴(西洋史准教授)/他執筆 世界思想社 2009年11月刊

大正女性文学論

金子幸代(比較文化教授)/他執筆 翰林書房 2010年5月刊

世界の言語景観 日本の言語景観 景色の中のことば

中井精一(東アジア言語文化准教授)/桂書房 2011年3月刊

蓮の花の片隅で ルネ・ヴィヴィアン詩集

中島淑恵(ヨーロッパ言語文化准教授)/訳 彩流社
2011年3月刊

鷗外と近代劇

金子幸代(比較文化教授)/著 大東出版社 2011年3月刊

日本語から考える！韓国語の表現

前田真彦(朝鮮言語文学35回卒)他/著 白水社 2011年3月刊

はじめて学ぶ宗教 自分で考えたい人のために

小澤 浩(元教授)ほか/著 有斐閣 2011年5月刊

生まれる

鈴木おさむ著 浅野美和子(国文学6回卒)/ノバライズ
朝日新聞出版 2011年6月刊

飛鳥の都市計画を解く

黒崎直(名誉教授)/著 同成社 2011年6月刊

宗隆様のご遺族より、人文学部同窓会に2万円のご寄付を頂きました。ありがとうございました。

ご寄付お礼

第2回下イッ文学ご卒業の澤井

年会費の報告

本年度の年会費納入状況をお知らせします。

平成22年6月1日～平成23年5月31日迄、346名(終身会費10名、年会費336名)の方々から436,000円の年会費を納入していただきました。

ご支援、ご協力を、厚く御礼申し上げます。

人文学部同窓会事務局

- 退官
 - 黒崎 直(考古学)
 - 木下 喬(哲学)
- 着任
 - 次山 淳 教授
歴史文化コース(考古学)
 - 藤本 武 准教授
社会文化コース(文化人類学)

(平成23年4月)

人文学部教官異動

☆第四回ホームカミングデイのお知らせ☆
10月1日(土)五福キャンパスで工学部・理学部を中心におこなわれました。会報の発行の関係でお知らせが遅れましたが、人文学部同窓生の方々も参加されました。

平成23年度人文学部 総会へのお誘い

拝啓 猛暑の夏も過ぎ、秋冷の季節となりましたが、皆様にはお変わりなく、ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、本年度の総会は、下記の要領で開催いたします。

多数の皆様のご参加をいただきたく、ご案内申し上げます。

敬白

人文学部同窓会長 松平 義磨

日時 23年11月12日(土) 午後1時30分

場所 ボルフアートとやま

(富山市奥田新町81 TEL076-431-1113)

講演

講師 鈴木 景二 教授

演題 1000年前の仮名を読む

このところよく売れている『もういちど読む山川日本史』に、富山で見つかった土器の写真が出ています。土器そのものはよくあるものですが、そこに書かれている仮名が全国的にも珍しいものなのです。1000年以上も昔、なぜ土器に仮名が書かれたのか。なぜ富山で見つかったのか。そもそも、何が書いてあるのか。なぜ解きの過程を追って、富山と日本の古代文化について、お話いたします。

懇親会：午後4時

会費：5000円(当日受付にてお納め下さい)

同封のはがき(現況通知・総会・懇親会出欠の回答)を10月28日(金)迄に、ご返送の程よろしくお願いいたします。

同窓生だより

☆平成23年度同窓会連合会総会の開催☆
さる7月14日(木)名鉄トヤマホテルで恒例の総会が開催され225名の同窓生が参加されました。
記念講演には、インテック代表取締役会長中尾哲雄氏(経8)が「私の歩み来た道」と題し、フィルムやエピソードを交えながら自らの半生を語られました。

その後懇親会となり、学部横断しての配置に、又新しい知己を得たかのような和やかな宴席で盛況でした。

☆高畑さん受賞☆
二ページにご寄稿いただいた、高畑史子氏(第3回英文学)は世田谷文学賞を受賞されました。平成二十二年第三十回世田谷文学賞、随筆部門第二席に選考され、「来し方行く末」或る高齢者の場合」と題された作品は「文芸せたがや」第三十号に掲載されています。

☆第四回ホームカミングデイのお知らせ☆
10月1日(土)五福キャンパスで工学部・理学部を中心におこなわれました。会報の発行の関係でお知らせが遅れましたが、人文学部同窓生の方々も参加されました。

一 報

謹んでご冥福をお祈り致します

- 吉田和夫(英文1教官) 平成23年1月23日
- 大谷重彦(独文・教官) 平成22年7月25日
- 手嶋政男(国文・教官) 平成23年3月28日
- 永崎 惇(史学7) 平成22年9月23日
- 佐口 透(東洋史・教官) 平成18年
- 大西恒次(人文地理42) 平成22年8月3日
- 鰐淵幹男(国文4) 平成22年10月27日
- 大宮智子(文化構造37) 平成22年11月15日
- 旧姓 若松 兵藤聖子(国文4) 平成22年2月
- 旧姓 平井 松井 巖独・教官 平成19年8月25日
- 橋場和明(西洋史29) 平成23年1月13日

編集委員

- 金村 正 佐野 和美
- 田中 史子 成瀬裕美子
- 山藤 登 富山 節子

